

地小出版
方小版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

亡き書店人の小出版社巡礼記 ——世に届けるべきものを出す小出版社の思い

文・蔡星慧

出版不況が続く中でどう生き残るか、どこかが赤字だという話しを耳にすると、ふと商業出版として現状を維持し、生きるのが今の出版界なのかと思える。そういった状況においては、「出版は文化」という出版人の誇りが陳腐に響くこともある。しかし、それほど利益が出なくとも、商業ベースばかりを考えては生きていけないのが、出版といった特殊な業界だ。

出版の自負を実感させてくれる一冊

それぞれの出版人が心の底から自負を持っているからこそ、続けていける世界なのだ。その自負を実感させてくれる一冊が刊行された。亡き書店人、小島清孝氏の『書店員の小出版社巡礼記』(出版メディアパル、2007/11)である。

小島氏は1972年、老舗東京堂に入社、三十年以上を書店人として生き、とりわけ、世の光に当てられることなく、消えていく小さな出版社の本を読者に届けることに思いを注いできた。

韓国版が先に刊行されていた

本書はそのような氏の思いが十分にうかがえる、小さな出版社に関する記録である。そもそも本書は日本版からではなく、韓国版が先に刊行されていた。韓国出版マーケティング研究所で発行されている「松仁消息」(のち「企画会議」)に2003年1月から2005年12月まで3年間連載されたものを2007年3月、同社で刊行している。

本書はその韓国版に、1997年11月



から2006年3月まで出版労連の機関誌『出版労連』に掲載された「本の目利きNOTE」を加えた構成になっている。

小島氏が地道な取材や思いを重ねた出版社の多くは、「売れる出版」より、「世に届けるべき出版物」を志にする出版社である。社員2人、3人というのも稀ではなく、不特定多数の読者ができるだけ多く確保しようとする世界とは無縁な出版社が大部分なのだ。

自社で徹底的に作る、読者にどう手渡すかを共に工夫する

これらの出版社で手掛ける出版物の内容は、社会、近現代・女性史などの歴史、思想、福祉、学術、宗教に至るまで幅広いが、いずれもマスで売れるとは思えないものばかりである。小島氏の取材によれば、良い本を出せば読

者はいる、自社の本は人任せにせず、自社で徹底的に作る、ノルマで自転車操業式に本を出そうとする発想は取らない、作っただけではなく、読者にどう手渡すかを共に工夫するポリシーに徹しているのだ。

小さな所だからこそできる出版、これらの小出版社の思いが続けられることで、「出版は文化」という出版の原点を自覚させてくれるのではなかろうか。

書店の現場から作り手の思いを伝えようとした書店人の記録



地道に本を届ける作り手や、決して売れるものばかりではなく、読者に本を伝える努力を続けてきた小島氏のような書店人がいたからこそ、出版界も

生き続けられる。日々ハードな業務の中でも、作り手の思いを伝えようとした書店人の記録に、本書の読み応えを感じる。氏は同連載以前にも、著書に『書店員の小出版社ノート』(木犀社、1997/7)があることからわかるように、書店の現場から注いだ氏の小出版社に対する思いは格別だ。氏は、パイプを愛し、お酒を愛し、本の重みで危うく床がぬけそうになったほど本が大好きであるが上に、書店人として読者に本を届ける工夫を人より重ねた出版人だった。

韓国版も、日本版の本書も見ることなく、氏は亡き人になられたが、小出版社の巡礼記が多くの人々に読まれ、氏が注いだ思いのように、小出版社の活動が世に届くことを願う。

(チェ ソンヘ／上智短期大学・東京情報大学非常勤講師)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『博物館の仕事』 ● 8人の学芸員著



調査や資料の整理方法、特別展の企画・実施事例を具体的に示す「I 学芸員の仕事」。立地地域に則した活動や展示において提示する地域像を検証する「II 地域とのかかわり」。社会に果たすべき役割や指定管理者制度の導入など、今日的な課題を検討する「III 現代社会と博物館」の3部からなる。業務ハンドブックの類ではなく、新江ノ島水族館、シルク博物館、相模原市立博物館、

横浜開港資料館など、八つの博物館で第一線に立つ学芸員が、日々何を考え、どのように仕事を進めているかを記したものである。市民の皆さんに是非読んでいただき、博物館のあり方を、一緒に考えるきっかけとしてほしい。

◆ 1680円・A5判・157頁・東京・岩田書院・2007/12刊・ISBN978-4-87294-494-5

『八甲田雪中行軍遭難事件の謎は解明されたか』 ● 松本明知著



明治35年に199名の死者を出した陸軍の雪中行軍第五連隊の公式報告書『遭難始末』には幾つか疑問点があった。それを医者である著者は当時の病床記録、新たに発見された治療記録から解明し、小説などの引用する事実に相違のあることを細かく指摘する。風による体感温度低下に触れた医師の結論を読むと、それから3年後の日露戦争、黒溝台の戦闘で凍死者が少なかったことも

頷ける。軍から責任を問われた大隊長を軍が密殺したと説く部分では、責任を取りたい者の意志を受け、介添人がその凍傷の指を持ち、ピストルの引き金を引き自決、との推測もあり得る、など、見方にもよるが小説にない面白さも持っている。

◆ 1785円・四六判・235頁・青森・津軽書房・2007/12刊・ISBN978-4-8066-0204-0

『移動式個展日本二周目の旅 [再会]』 ● 川村公志著

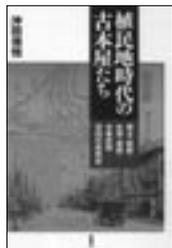


旅をしたい、写真が撮りたい、写真を見せたい。20代の写真家、川村公志は2004年5月、地元高知県をワゴンで出発、1県1週間のペースで出会った人々や風景を撮影、週末には車に写真を貼り移動個展を開催。1年2ヶ月間の「移動式個展日本一周の旅」をまとめ2005年に発売された写真集は、偶然出会った人々の、しかし心からの笑顔に溢れ、人気を博した。2006年、前回の旅中

に出会った人々や風景との再会を期し、日本二周目の旅へ。人と自分と明日を真っ直ぐに見つめ続けた旅で、多くの笑顔に再会し、また新たな笑顔に出会った。笑顔が笑顔を生む、一期一会の写真集。

◆ 2100円・180mm×185mm判・232頁・高知・リーブル出版・2007/12刊・ISBN978-4-947727-95-4

『植民地時代の古本屋たち—樺太・朝鮮・満州・中華民国 空白の庶民史』 ● 沖田信悦著



「売れすぎて、棚が空くのが嫌で高値をつける、それでも飛ぶように売れた」、「建国当時は『マルクス=エンゲルス全集』が並んだ」という。そんな証言に驚かされる。第二次大戦前、日本の「植民地」であった樺太、朝鮮、台湾、満州、中華民国に展開していたのは軍隊や国策会社、開拓団だけではない。多くの古書店が進出した。本書は当時の古書店事情と活動を『古書月報』など業界情

報誌を基本資料として纏め上げた。随所に掲載された当時の各地域の市街地写真が臨場感を高めている。独自性に拘泥し、時に歴史離れする歴史叙述があるなか、古書店主としての著者は同業界のエポックを冷静に描ききっている。

◆ 2100円・四六判・190頁・北海道・寿郎社・2007/12刊・ISBN978-4-902269-23-9

『お江戸超低山さんぽ』 ● 中村みつお著



東京の町中に残る江戸情緒豊かな超低山を紹介した珍しい本。高さは約6mから高いので標高約45m。山、丘、坂の頂といった天然ものから、公園や庭園の築山、富士塚など人工によるものを含む。これらは身近な名所として、古くから庶民の遊楽や信仰の場として賑わってきた。それだけにその沿革や歴史を知るといっそう興味深い。親しまれているわりに未知の部分が多いが、本書は

軽妙な筆でそれらを要領よくガイドしてくれる。なんといっても丁寧な色刷りのイラストがよい道案内役を務めている。周辺の名所、旧跡、味どころの紹介まであり、本書をポケットに早速散歩に出てみたくなる本である。

◆ 1365円・四六判・135頁・福岡・書肆侃侃房・2007/12刊・ISBN978-4-902108-67-5

売行良好書

期間：2008年2月16日～3月15日

〔出荷センター扱い〕※税込み価格

- (1)『作っておくと、便利なおかず』1260円・ベターホーム出版局 (2)『ゆりちかへ』1365円・書肆侃侃房 (3)『愛の歌 恋の歌』1700円・関東図書 (4)『子どもを生きれば おとなになれる』2100円・アスク・ヒューマン・ケア (5)『機能不全家族』1600円・アートヴィレッジ (6)『医者、用水路を拓く』1890円・石風社 (7)『いい会社をつくりましょう。』1260円・文屋 (8)『お江戸超低山さんぼ』1365円・書肆侃侃房 (9)『古いシルクハットから出た話』1680円・成文社 (10)『風の人 宮本常一』2100円・みずの出版 (11)『近代日本の植民地博覧会』3150円・風響社 (12)『植民地時代の古本屋たち』2100円・寿郎社



〔三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書〕※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『よみがえる滝山城』735円・揺籃社 (2)『続・埼玉の城址30選』1260円・埼玉新聞社 (3)『近代日本の植民地博覧会』3150円・風響社 (4)『旅する長崎学 8』600円・長崎文献社 (5)『駅前旅館をいとおしむ』1680円・クラッセ (6)『沖縄そばガイド すばナビ』900円・編集工房東洋企画 (7)『驚きの猿文化』2520円・三重大学出版会 (8)『関東の桜 群馬・栃木・茨城』2100円・歴史春秋社 (9)『秋田「祭り」考』1785円・無明舎出版 (10)『植民地時代の古本屋たち』2100円・寿郎社

〔ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書〕※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『広告批評 No. 324』590円・マドラ出版 (2)『日々 11』735円・アトリエ・ヴィ (3)『酒とつまみ 第10号』400円・大竹編集企画事務所 (4)『昭和プロレスマガジン 14』1000円・昭和プロレス研究室 (5)『広告批評 No. 322』590円・マドラ出版 (6)『挑まれる沖縄戦』2500円・沖縄タイムス社 (7)『大河にコップ一杯の水 第1集』2100円・合気ニュース (8)『NO! No. 93』300円・海鳥社 (9)『野宿野郎 5号』500円・野宿野郎編集部 (10)『関東の桜』2100円・歴史春秋社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
<http://www.bekkoame.ne.jp/~much/>

トピックス

▼木村伊兵衛写真賞

新人を対象とし、著名な写真家を数多く輩出していることから「写真界の芥川賞」と呼ばれることもある木村伊兵衛写真賞に、今年はセンター扱いの写真集3点が選ばれました。受賞したのは志賀理江子さんの写真集『Lilly』（アートビートパブリッシャーズ4725円）および『CANARY カナリア』（赤々舎5250円）そして岡田敦さんの写真集『am』（赤々舎2940円）です。そう言えば昨年の受賞作品がセンターでも扱っているリトル・モア刊『うめめ』で、一昨年がこれもセンター扱いのリコシェが発売元になった『IN MY ROOM』（発行は蒼穹舎）でした。

▼三省堂フェア売上ベスト

3月上旬まで開催されていた三省堂書店神保町本店4Fでのミニコミフェア『地方の小さい出版社集合！～お宝を探せ～』の売上ベストを報告いたします。(1)『モツ煮狂い 第2集』504円・平成鳥有堂 (2)『東京かわら版 3月号』420円・東京かわら版 (3)『酒とつまみ 10号』400円・大竹編集企画事務所 (4)『きのこ 13号』735円・日本キノコ協会 (5)『野宿野郎 5号』500円・野宿野郎 (6)『夜想#ヴァンパイア』1575円・ステュディオ・パラボリカ (7)『過疎と廃村の風景』1050円・HEYANEKO (8)『昭和プロレスマガジン 12号』1000円・昭和プロレス研究室 (9)『貸本マンガ史研究 19』500円・シナプス (10)『HB 03』500円・HB編集部

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
 F A X : 0 3 - 3 2 3 5 - 6 1 8 2

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
 TEL. 03-3233-3312(代)
 URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

営業の
ごあんない

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

